

「恵まれた人」

ルツ記 第2章 10節～13節
ルカによる福音書 第1章 26節～38節

説教 本庄侑子伝道師

この事さえあれば、一生、生きて行ける。その様な言葉を聞いています。「恵まれた女よ、おめでとう、主があなたと共におられます」(28節)。マリヤが御使ガブリエルから伝えられた言葉です。

私たちは“恵み”という言葉をよく聞きます。それは才能に溢れ、財に富んでいる時に使われます。しかし、聖書に於ける“恵み”は神様からの一方的な贈り物です。そうだとするならば、マリヤのどこが“恵まれた人”なのでしょう。ある英語の聖書では「O favored one!」とあり、神様の特別な人という響きがあります。

けれども、この時、マリヤが受け取った贈り物は過酷な事でした。10代の少女が男の子をみごもるのですから。しかも、婚約者のヨセフの子ではない子を見ごもったのですから。公に知られば、石に打たれて殺される罪です。人間的には“恵み”とは言い難い悲劇でした。それでも、聖書は“恵み”、贈り物、と言うのです。

旧約聖書に登場するルツもそうでした。夫に先立たれ、姑ナオミと共に外国に移住し、落ち穂を拾って生活していたのです。その時にボアズに出会いました。ボアズはルツに声を掛けます。ここで落ち穂を拾いなさい、と。それだけではありませんでした。様々な面で優遇されます。ルツは“恵み”に驚き、ひれ伏しました。「まことにありがとうございます。」(13節)は、英語では「I have found favor in your eyes.」です。待遇の内容ではなく、主なる神様のまなざし、心遣いに触れたのです。この方は、私を見ていて下さった。天の父が見ていて下さったと、天からの“恵み”に触れ、慰めを得ました。

ルツもマリヤも“恵まれた人”でした。それぞれの失意や悲劇の中にあっても恵まれていたのです。神様からの“恵み”は、私たちが喜ばせるもの、恐れさせるものと、それぞれです。神様の“恵み”のできごとは、私たちの理解を遙かに超える事です。神の子がベツレヘムの飼葉桶に生まれた事も。王となるべき方が十字架刑に処された事も。そして、復活、聖霊降臨と、私たちの目には恐れある事が起きるのです。

ガブリエルは「恐れるな、マリヤよ、あなた

は神から恵みをいただいているのです。」(30節)と伝え、マリヤ個人の人生を超えた、神様の壮大なご計画を告げます(32～33節)。また、「聖霊があなたに臨み、いと高き者の力があなたをおおうでしょう。それゆえに、生れ出る子は聖なるものであり、神の子と、となえられるでしょう。」(35節)と、人間ではなく、神様が起こされるできごとだ、と断言します。さらに、エリサベツも老年ながら子を宿している事を告げます。マリヤは、エリサベツなら分かってくれる、神様が起こされたできごととして語り合える、と信じ、エリサベツの所へ行きました。

私たちの身にも聖なるできごとが起きています。私たちもマリヤのように、人生に起きるできごとによって恐れを抱き、胸を騒がせ、人間の可能性を考えて思い悩みます。その私たちに神様は、「恐れるな!」と告げ、自分ひとりの人生から、世界に対する神様のご計画へ、人間の可能性から全能なる神様へと目を向けさせて下さいます。一人では耐えられないできごとでも、教会の中で語り合える場を与えて下さいます。

クリスマスは、私たちの人生と無関係に起こったものではありません。マリヤは「わたしは主のはしためです。お言葉どおりこの身に成りますように」(38節)と言って、自分の人生に引き受けました。神様への信頼の言葉、信仰の告白です。この後、マリヤは「胸を刺し貫かれる」(ルカによる福音書 第2章35節)できごとに出会います。自分の産んだ息子が十字架で死ぬという痛みを人生に負いました。しかし、神様の“恵み”の計画はマリヤの上に進んでいました。マリヤは“恵まれた女”でした。

ルツはその後、ボアズと再婚し、子どもが生まれます。やがて幾代にも亘って“恵み”が届けられ、イエス・キリストが生まれるのです。私たちも、神様のまなざしと心遣いの下にある“恵み”の計画に巻き込まれています。この事さえあれば、一生、生きて行ける。そのような言葉と共に、教会の新しい一年が始まりました。神が人となって生まれてきて下さいました。主はやがて、“恵み”の完成の為に再び来て下さいます。「恵まれた女よ、おめでとう、主があなたと共におられます」(28節)。

(記 説教要約奉仕者)